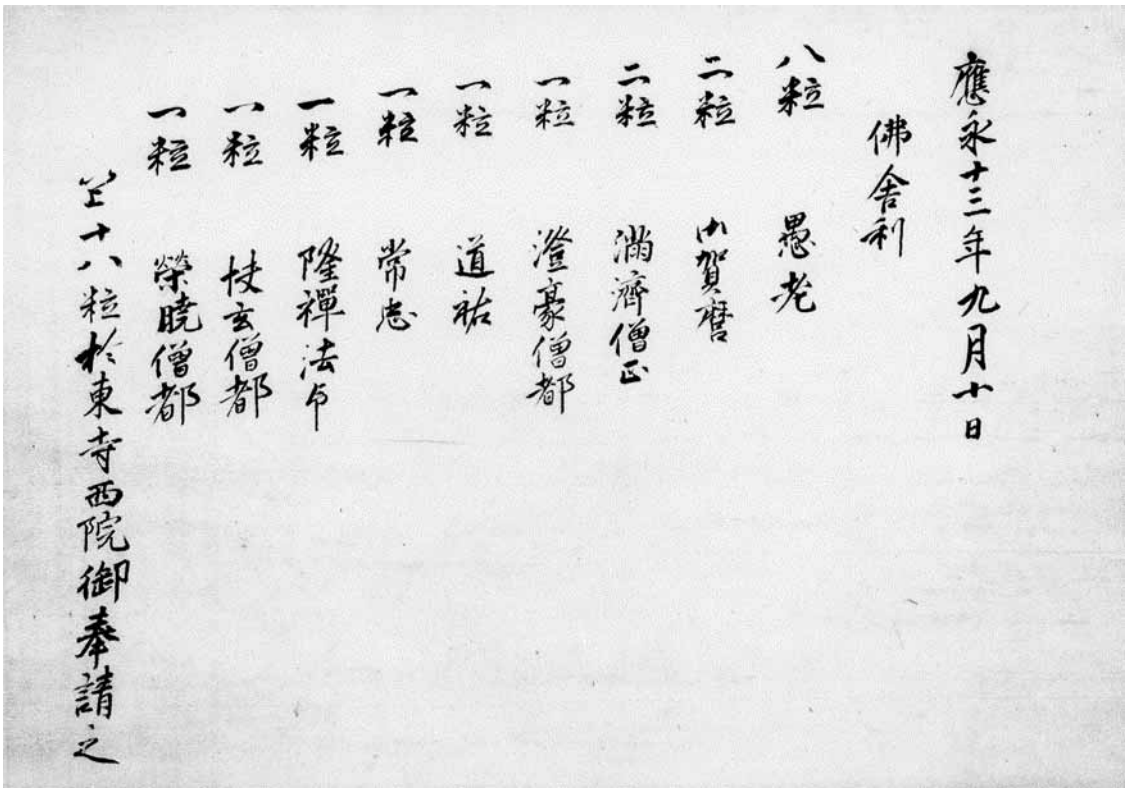
総合資料館だより

2004.10.1　No.141


應永十三年九月十日
佛舍利
八粒　愚老
二粒　山賀麿
二粒　滿濟僧正
一粒　澄豪僧都
一粒　道祐
一粒　常忠
一粒　隆禪法印
一粒　快玄僧都
一粒　榮曉僧都
已上十八粒於東寺西院御奉請之

▲足利義満仏舍利奉請状

足利義満、仏舍利の奉請を自ら記録

応永13(1406)年９月10日に、足利義満が東寺の仏舍利を請い受けた直筆の文書です。最初に「愚老」として、八粒を貰い受けているのが義満です。

舍利とはサンスクリット語を音訳したもので、身体・骨格を意味し、転じて遺骨のことをいいます。仏舍利は、仏教では特に釈迦の遺骨を意味します。東寺の仏舍利は弘法大師空海が入唐中、師の恵果から直接授けられたもので、帰朝の際に持ち帰り、「大師請来仏舍利」と称されて多くの信仰を集めました。

平安時代から、この仏舍利を貰い受けること（奉請（ぶじょう））が行われました。天皇が勅使を立てて綸旨を東寺に遣わし、東寺僧侶が仏舍利の納められた壺を宮中に持参し、清涼殿や真言院で開封・分与（奉請）が行われます。その際、列席した奉請の担当者（勅使を勤めるのが普通）などの公家衆、僧侶がお裾分けにあずかることがあり、奉請された人の名前と、舍利の粒数を記録したものが奉請状です。のち勅封が施され、舍利を納めた壺は東寺に戻されて、厳重な管理下に置かれるのです。

応永13年のこの時、義満は自身が東寺に出向き、御影堂の弘法大師絵像ほかの宝物を拝観しました。その後、宝蔵の舍利壺を出させて勅封を開き、八粒を奉請したのち、同席した御賀丸以下の人々に十粒を分与して、封を加えました。その記録を自ら認めて、東寺に残したのです。

（第19回東寺百合文書展「足利義満と東寺」から）

目次

足利義満、仏舍利の奉請を自ら記録……1
歴史資料課の窓から「記録の中の“新選組”」……4
最近の収集資料から……9
東寺百合文書展 ……2
文献課の窓から「蓑虫の工芸品について」……8
府民講座のお知らせ、友の会事務局から　ほか ……10

第１９回　東寺百合文書展
国　宝　－足利義満と東寺－

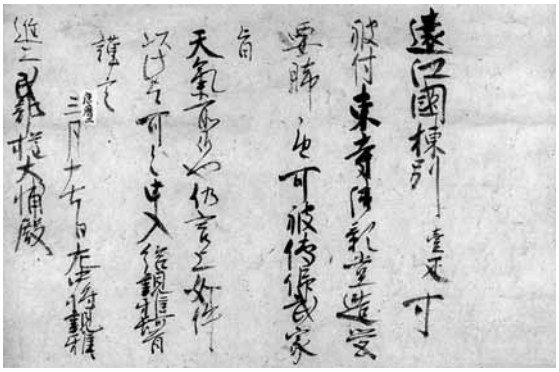
会　　期	平成16年10月１日（金）～10月31日（日）（10月11日（祝）・13日（水）は休館） 午前９時～午後４時30分
会　　場	京都府立総合資料館　２階展示室（入場無料）
列品解説	10月９日（土）、23日（土）　午後２時～
記念講演 （府民講座）	富 田 正 弘 氏（富山大学人文学部教授） 演題「義満時代の政務文書と国家祈祷」

※申込み方法等は、10頁をご覧ください。

東寺百合文書は、およそ900年間にわたる奈良時代末期から江戸時代初期に至る総数19,000点を超える古文書群です。その内容の豊富さから中世史研究の宝庫とされ、平成９年には国宝指定を受けました。当館ではこの文書に理解と関心を深めていただくため、定期的に展示を行い、好評を得てまいりました。今回は「足利義満と東寺」と題し、60点余りの文書を選んで、ご覧いただきます。以下、展示の概要といくつかの展示文書を紹介します。

足利義満（1358年～1408年）は室町幕府第３代将軍です。その到達した地位は、祖父尊氏・父義詮（よしあきら）をしのぎ、掌握した権能は天皇・上皇を凌駕しました。そして管領（かんれい）を始めとする幕下の有力守護大名を制圧して幕府権力を確立しました。また、摂関家などの公家勢力、寺社等の宗教勢力をも、意のままに操るようにもなります。南朝との講和を果たし、対明貿易を開いて政治的安定と経済的繁栄、北山文化の開花をもたらしました。将軍辞職後も実権を握りましたが、応永15（1408）年、急死しました。本展は、権力者として史上特異な光芒を放つ彼の足跡を、東寺に残る文書に見ようとするものです。

康暦元（1379）年、東寺西院御影堂が火災により焼失しました。東寺は再建のための費用調達を幕府に願い出、幕府はこのことを朝廷に報告して、判断を仰ぎます。当時の後円融天皇は遠江国に棟別銭（むなべつせん）（建物税）と段銭（たんせん）（土地税）を課して、費用に充てるよう指示します。そのことを幕府に伝えるよう、連絡役の廷臣に命じた綸旨（りんじ）です。



▲後円融天皇綸旨

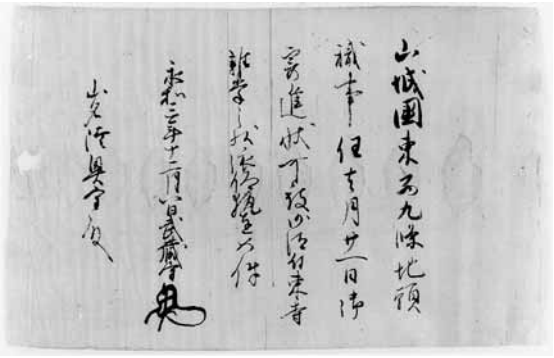
後円融天皇は応安４（1371）年に即位し、10年余り在位して、永徳２（1382）年、後小松に位を譲ります。自らは上皇となって院政を開きますが、南北朝の合一が成立した明徳３（1392）年の翌年、死没しました。

後円融天皇の母崇賢門院藤原仲子は石清水八幡宮の社僧（大きな神社には僧侶が置かれていました）善法寺通清という人の娘であって、足利義満の母紀良子も通清の娘でした。したがって天皇と足利義満は従兄弟同士ということになります。天皇は延文３（1358）年12月12日生まれ、義満は同年８月22日生まれで、同い年です。朝廷と幕府の最高位にあった２人の確執は、天皇の譲位問題や義満の女性問題などに関して、当時の人々の日記にしばしば語られています。

山城国東西九条という土地は幕府政所（まんどころ）の料所でしたが、康安元（1361）年に足利義詮が東寺の修理費用として、１年分の年貢を寄付しまし

た。翌年にも同様の寄付が行われましたが、土地そのものの寄進ではありませんでした。

永和３(1377)年、義満はこの土地の地頭職を東寺に寄進します。管領細川頼之が義満の寄進状を受けて、そのことを侍所頭人山名氏清に伝え、東寺の雑掌に土地支配を実行させるよう命じたのが次の文書です。



▲管領細川頼之施行状

細川頼之は四国の守護でしたが、貞治６(1367)年、死期の近づいた義詮に請われて上洛し、義満の補佐と管領職を委託されました。12年の在任中、将軍の権威確立と幕府体制の強化に力を尽くしましたが、長期政権に対する諸大名の反発にあって罷免され、四国に戻ります。のち義満が再登用をはかり、幕政に復帰しますが、明徳３(1392)年病没します。義満に将軍としての心構えを教えこみますが、詩文などの教養面や、禅宗に対する関心などでは義満と共通するところがありました。

▲真言院後七日御修法請僧交名

新年の宮中では、元旦から７日まで御斎会という天皇主催の儀式が行われます。その後の７日間、東寺長者が密教修法を真言院で主宰します。これが後七日御修法であって、長者とともに護摩等の各法を行う僧侶の名簿が請僧交名です。毎年長者が自筆で作成し、裏面にその年の経過や感想を書き留めています。応永29(1422)年には、長者の大覚寺義昭が大阿闍梨（主宰者）を勤め、この文書を残しました。

義昭は足利義満の息子であって、将軍となった足利義持や義教の弟です。応永22年には大覚寺に入っていますが、皇子と異ならない扱いを受け、また本人もそれに相応しい振る舞いであったといわれます。応永28年に東寺長者となり、翌年このとおり御修法を主宰しました。応永34年にも東寺長者になっています。ところが永享９(1437)年、旧南朝の勢力と共謀し、突然大覚寺を出奔します。そして大和･九州と逃走･潜伏を続けますが、最後には嘉吉元(1441)年、日向で島津氏に討たれて死亡します。南北朝合一の際の両統迭立という約束を将軍家が無視し続けることに、将軍家の一員でありながら、大覚寺門跡として不快に耐えない思いからの行動と、同時代の人は評しています。

▲御室宮令旨

相国寺は足利義満の発願により起工され、伽藍が完成しました。その後、父義詮の33回忌追善のため七重大塔の建立に取りかかり、応永６(1399)年９月、落慶法要が営まれました。父の年忌と義満自身の厄払いを兼ねる私的法事でありながら、国家的法要に準ずるものとされ、一代の盛儀といわれました。関白・左大臣・内大臣など朝廷の高官が諸役を受け持って参列し、天台座主・仁和寺門跡といった高僧が導師役を勤めました。一般の僧侶は宗派を問わず、１千人が動員されました。この準備のため、多くの文書が関係者の間を往復し、残されています。この文書はその準備も終わり、法会の間近になって、当日の好天を期待する御室宮が、風雨の難が無いように東寺に祈らせた文書です。雨が降らないように、またあるときは降るように、天候について祈ることも東寺に課せられた重要な役目でした。

古文書つれづれ29

幕末京都の事件と記録

記録の中の“新選組”

幕末動乱の時代、己を信じてがむしゃらに生き抜いた「新選組」は、今なお多くの人々を惹(ひ)きつけ、その姿は数々の小説や映像等で生き生きと描かれてきました。しかし、当時の人々には彼らは一体どう映っていたのでしょうか。

新選組が市中警固の役目等のため京都で過ごしたのは文久３(1863)年２月から慶応４(1868)年正月迄の５年間ですが、その頃の記録を丹念に見ていけば、彼らの姿や噂話、彼らにまつわる事件等を記した日記や風説書(ふうせつがき)（世間の噂等を書留めた幕末時事情報誌的なもの）等を見つけることができます。その多くは断片的な聞き書きで誤報や流言・デマ等も含まれていますので、単純にその内容を信用することはできません。しかし、たとえデマといえども人々の口の端に上り記事になったということは、人々に関心を持たれていたという事実を示しており、彼らに関する貴重な情報です。いずれも小さな記事ですが、その一つ一つを拾い上げて積み重ねていくことは、新選組の実像に近づく手がかりの一つになるといえるでしょう。

これら風説書や日記等については、今年の7月16日～8月31日に開催した「収蔵品展」で展示しました。今回の「古文書つれづれ」では、展示では紹介できなかった記事も含め、もう一度「記録の中の“新選組”」を紹介したいと思います。

＜壬生浪士組の頃＞

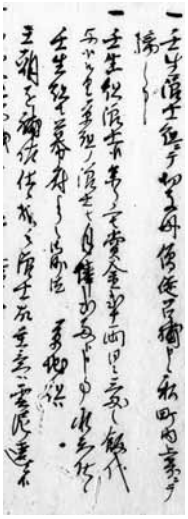
文久３(1863)年３月、将軍上洛に際し募集のあった浪士組の一員として上京し壬生に駐屯、本隊の帰国後も京都守護職御預りとして残留して京都の治安にあたりましたが、「８月18日の政変」で認められるまでは肩身の狭い思いもしていたようです。この頃は「壬生浪士（組）」「会津藩御預浪士（組）」等と称されていました。

文久3年7月頃　「風説書」（平和家文書1566）

一壬生浪士組ニテ切支丹僧徒召捕申候、私町内上寄ニテ擒之申

一壬生浪士組江参り候へ者、賞金弐十両、日々三両之飯代与え候由、京組ノ浪士者月俸弐両と申事承知仕候、壬生組者幕府より之御沙汰 京地組ハ王朝を補佐仕候様之浪士故、主意ハ雲泥ノ違ニ候

綾部藩家老平和(ひらわ)安遷氏が壬生浪士（新選組）の印象を記したものと思われます。「壬生浪士になれば賞金20両と日々３両の給金がもらえるが幕府に仕えるものである。しかし、京地組（この頃、禁裏御所警備を願い出た十津川郷士のことか）は月２両と報償は少ないが王朝のためにつくす浪士達で、目的とする考えが雲泥の差である」給金の額等に誤解も多く、平和氏ら武士身分の者達にとって、新選組は金により集められた集団にしか映らなかったのでしょう。



文久3年7月26日条　「町代日記」（古久保家文書82）

先月頃大坂ニ而、相撲取弐人を京都壬生ニ罷在会津侯御預之浪人が御打取、右者過言不届候旨ニ而、尤大坂御役所へも届捨ニいたし候由

大坂での力士との乱闘事件について記したもので、無礼な発言をとがめ、相撲取り２人を討ち取ったということです。

文久3年7月29日条　「町代日記」（古久保家文書82）

近日（朱書挿入）「壬生と書入有之候処後ニ帯刀人来り相けし候事」浪士共金子借用之義申越し候趣も相聞候、右ハ全く貪欲より起り候義ニ付、已後奸計と相心得有様之義ニ付頓着致間敷事

近頃の浪士の借金について室町三条に張り出された紙を写したものです。注目したいのは朱書部分で、「壬生」との書込を「帯刀人」が来て消したという箇所です。帯刀人とは一体誰だったのでしょう。

文久3年8月10日　「風説書」（平和家文書1566）

京都之風説荒増ニ候へ共聞及候丈申上候、去ル十日上京候へハ島原之裏ニ壱人斗之胴有之、是者裸ニ御座候、是ハ見申候首無之候間如何之訳哉ハ尋候へ共知れ兼候処、其後承り候へ者、会津侯之浪人組之内之由、是ハ勇士之由ニ候へ共、遊女屋等ニ而乱妨致、何分度々ニ相成候由ニ而、右同類之内ニ而、遊女屋江参り候所江参り、しはり上裏道へ連行首を取候由

島原遊郭の裏で発見された首無し死体の噂話で、「浪人組の勇士だけれども遊女屋でたびたび乱暴をするので、その同類が遊女屋へ行き縛り上げて首をはねた」と書かれています。素行の

悪い浪士を仲間が処分したということでしょう。

＜８月18日の政変の頃＞

８月18日の政変に出陣後、町中の人が新選組の存在を御触で公式に知ることになります。

＊**８月18日の政変**　文久３(1863)年８月18日、会津藩と薩摩藩を中心とする公武合体派が、長州藩を中心とする尊王攘夷派を京都から追放した事件。未明より御所の門を厳重に警備した上、長州藩と尊王攘夷派の公家の排除が布告された。このため三条実美ら七卿と長州藩兵は長州へ撤退することになった。

文久3年8月18日　「役中日記」（千吉西村家文書）

八月十八日早暁より禁裏御所前代未聞之大騒動、何之故歟ハ不知、前夜四ツ時より、守護職松平肥後守殿多人数ヲ召連、俄ニ内参、中川宮様ヲ奉供禁中へ罷出、諸々江触有之候歟、在京之諸大名ハ素より諸屋敷方留主居等ニ到迄、一家も不残追々守護ニ被出候、（略）中ニも壬生浪士中但し肥後守殿御預り分四五十人ヲ何れも手ニ〳〵白刃鑓長刀所持致、身ハ錏襦袢或ハ同頭巾等着し、大将分両人甲冑ニ而当方表通行被致候、（略）

８月18日の政変の時、新選組が出陣する様子を記しています。錏（しころ）襦袢や頭巾を身につけ刀・鑓・長刀を携えた4･50人と、甲冑を着込んだ大将分２人（おそらく近藤勇と芹沢鴨）が西村家（中京区三条衣棚町辺）の表、三条通を抜けて御所へ出陣していったのでしょう。新選組については噂話を記しているものが多いのですが、これは実際に目にした姿だと思われます。

文久3年8月21日条「風説書」（平和家文書1566）

夕、町触ニ而左之通申来武左衛門差出

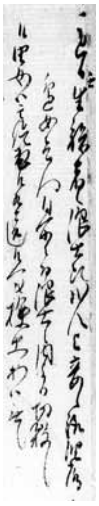
松平肥後守殿御預浪士、市中昼夜見廻候様肥後守殿被仰付候条、為心得持場限相達置候様、被仰渡候 、右御触相成候趣意ハ、浪士不行跡行候者を召捕候趣、御預浪士、早朝より御所外御静謐之処、今日ハ追々御参内、御固メ増候風聞

京都守護職が新選組に市中見廻役を命じたという町触が出されたこと、浪士達が早朝より御所を警護していること等が記されています。この触の記事は古久保家文書等にも見られます。

新選組はこれまでも市中警備にはあたっていたのでしょうが、公式に京都町中に知らされたのはこの時が始めと思われます。

文久3年9月21日条　「町代日記」（古久保家文書82）

過日壬生旅宿之浪士頭弐人と妾之趣油小路辺女壱人、同所ニ而浪士之内より切殺し候由、女ハ其儘宅江相送候へ共、検使等ハ無之



壬生浪士組局長芹沢鴨等の暗殺の記事です。「先日壬生にいる浪士の頭２人と、油小路辺に住まいする女性が、同所で浪士内のものにより斬殺されたが女性の遺体はそのまま自宅に送り検使はなかった」と記されており、長州藩の仕業等と噂された芹沢鴨の死亡について、町奉行所では事件直後から浪士組内部の犯行であることを了解しており、変死があった場合に行う検使を省略していたことがわかります。

＜池田屋事件の頃＞

新選組が活躍した元治元(1864)年６月５日の池田屋事件は、センセーショナルな事件だけに様々な風聞が飛び、誤情報も多く出回ったようです。また「新選組」の名もまだ一般的でなく、「壬生浪士」と称されたり、江戸で同じ頃に結成された「新徴組（しんちょうぐみ）」に誤認されていました。

＊**池田屋事件**　幕末の尊王攘夷派弾圧事件。８月18日の政変後、長州・土佐・肥後各藩の尊王攘夷派は京都に潜入していたが、肥後の宮部鼎蔵（みやべていぞう）、長州の吉田稔麿（よしだとしまろ）の会合を察知した新選組が、三条小橋の旅館池田屋を襲撃、多数の死傷者を出した事件。禁門の変のきっかけとなる。

＊**新徴組**　幕府が江戸に戻った浪士組を改めて再編し、庄内藩にその指揮を委任して江戸市中の取締にあたらせたもの。

元治元年6月5日　「幕末風聞書留」（大國家文書257）

六月五日

昨昼後、四条真町江向ケ壬生浪士様之者八人・下部三人罷越、枡屋喜右衛門方ニ而土蔵ニ有之候左之品

武着類

兜 桑方 壱ツ　桃成形　壱ツ、鎧 弐ツ、

陣笠取合 五ツ計、長持 弐棹、両掛 片シ、

竹筒凡壱尺計 三四本計 焔硝入有之、

鎗 弐筋、巻物取合 八本計、絹幡様之者 壱ツ、

鉄砲玉様之物 但し紙色ニ致し数不分、

焔硝入　八升樽ニ七八分目計、凡壱間計松之木四本、ほりぬき凡八貫目計、

右之外色々有之候へとも、車ニ而壬生江持帰候よし

池田屋事件の発端、枡屋喜右衛門（古高俊太郎）宅捜索についての風説書の一つです。この資料では、６月４日の午後に土蔵を調べてそこにあった武器類を壬生まで車で運んだとされていますが、他の風説書では５日の朝に逮捕、確認した品々は具足７領・槍10本・鉄砲10挺・塩硝沢山、外に張貫大筒２挺・太刀幕固幕串等となっている等、情報の食い違いがみられます。

元治元年6月5日　「人のうわさ」

当月五日夜中、俄ニ長印と申立浮浪潜伏先江、討手之義ハ先日申上候通り御人数ニ而、右露顕相成候義ハ、壬生御旅宿松平肥後守殿預り新徴組、浪士事柄相分り候よしと申義ハ、右組内之衆ニも荷担被致候もの在之よし、兼而探索罷在候手入先左々

二条新町東入町木薬渡世枡屋　安兵衛

父　喜右衛門

此喜右衛門義者、至而学者ニ而　元ハ山印気立之ものニ而、先年より高瀬四条上ルずしニ隠宅罷在候

（略）

事件の風聞の一つです。浪士のことが分かったのは、新徴組（新選組の間違い）に協力者がいて前々より枡屋喜右衛門方を探索していたからと書かれています。事件の発覚については他に、枡屋安兵衛が父の隠居家に浪士が集まっていることを恐れて訴え出たから、水戸藩浪士が大挙して上京してきたので江州膳所藩が一橋侯に届け出たから、としているものもあります。この「人のうわさ」には、事の発端から逃亡者の捜索や浪士達の最期の様子等まで、池田屋事件に関わる種々の風聞が書き留められています。ただ日時・警固の人数・人名等を始め、色々な情報が混乱しており検討が必要な資料です。

なお桝屋喜右衛門に関する資料として、住居のあった真町の文書（「真町文書」）の中に「家屋敷改図」「家財諸道具改帳」等があります。

元治元年6月5日　「若杉家日記」（若杉家文書2162）

市中何歟大変之事御座候ニ付、会津藩・壬生浪士・所司代藩・加州藩多人数抜身鎗抜身刀等ニ而固之様子、風聞ニ者、水戸浪士或者長州浪士等と(カ)申候事ニ而、京都へ入込乱謀いたし候趣承ル、右ニ付壬生浪士乱謀もの召取相成、アレコレト怪我人者、多分御座候也

池田屋事件直後に日記に簡潔に記された事件の様子です。「何か大変なことが起きたということで、会津藩や壬生浪士ほか多人数が刀や槍を持って警護している。水戸や長州の浪士が京都にやってきて乱暴をするような噂があったので、壬生浪士が乱暴者を召し捕り、多くのけが人が出たということだ。」市街地での激しい斬り合いは京に住む人々を驚かせ、多くの日記に書き留められました。

＜禁門の変の頃＞

元治元年７月19日の禁門の変では、新選組は伏見への入口勧進橋（銭取橋）辺を守り、更に21日、山崎天王山に立てこもった長州藩士や真木和泉等と戦って切腹全滅させました。

＊**禁門の変**　蛤御門の変ともいう。元治元年７月19日、前年の８月18日の政変によって撤退を余儀なくされた長州藩が、形勢挽回のため京都に出兵し会津や薩摩等の藩兵と御所の門付近で戦った事件。長州軍は多数の戦死者を出し敗走した。また、この兵火による「どんどん焼き」は京都の町を焼き尽くした。

元治元年7月21日　「風説書」（平和家文書565）

（略）

扨又翌廿日暁、残党為追討山崎表天王山江、手勢并井伊掃部頭様・松平越中守様・松平図書守様四家之人数差向、天竜寺にて松平修理大夫様・松平隠岐守様・酒井若狭守様・大久保加賀守様・本多主膳正様之御人数進発之手配相定、翌廿一日暁諸手一同発向之処巳刻より合戦相始、新撰組并手勢之内一隊先手ニ進出、段々麓より取懸候処、賊徒山上より及炮発候ニ付厳敷打合数刻及逃走賊徒不叶覚悟致候哉絶頭陣営も火を放候間、猶又攻登、賊営攻抜候処、賊徒大凡廿人余、何れも歩卒、割腹枕を并打臥罷在、中ニハ焼死之者も相見、右ハいつれも歩卒体ニ無之将長ニも覚敷人体ニ而、右之通賊徒壱人も不残掃攘ニ及ひ跡之取掃仕置申、翌廿二日昼四半時比総人数凱陣仕候

（略）

七月晦日　松平肥後守内　石沢民衛

禁門の変の顛末を記した会津藩家臣の手紙の写です。これによると、山崎天王山の戦いにおいて、数多の追討軍の中で、新選組は会津藩の一隊とともに先頭を切って激しい戦いに挑んだことがわかります。新選組の戦闘能力は会津藩に認められていたのでしょう。

元治元年7月　「御仁恵御触書写」（福長町文書）

今度類焼ニ逢難渋之者［銭米］(他から補足)又ハ粥等為御救被下候得共、運路難捗取、京積米払底之趣ニ付、尚御仁恵を以不取敢市中一体へ玄米為御救被下、其上ニも類焼町々之者共江ハ、尚又玄米一万石増被下候

米渡場所

一下立売釜座守護職御屋敷　壬生寺境内　四条道場境内

右之趣洛中洛外町続町々へ不洩様可相触もの也

大火の後、被災者救援の為に出された御触の一つです。幕府は米を配りますが、その場所の一つに「壬生寺境内」が示されています。当時壬生寺の境内は隊士たちの訓練所でもあり、壬生寺境内での米の配給には何らかの形で新選組隊士達が関わっていたのではないでしょうか。

＜長州征伐の頃＞

禁門の変で勝利し勢いに乗る幕府側ですが、江戸幕閣と京都守護職等との間に誤解が生じ、援助を断たれた会津藩は財政的に苦しい立場に追い込まれます。

元治元年11月頃　「幕末風聞書留」（大國家文書651）

新撰組浪士より当地富家鴻池初二十四家江、金五千両借用頼ニ相成候処、三十軒ニ而三千両、次ニ十四軒ニ而二千両調達頼之割、例之押付借ニ而無余儀、夫々共承知ニ相成候由、会津より賄相渡り不申ニ付借用之趣意也、公辺御用令被仰付候とも歎願いたし幾何度トナク願出、中々急速ニ御請不申候へ共、公之威光より浪士ノ威ハ盛ナルカ速ニ調談、一日内ニ相整候との趣、なんと歎息之到ニハ無之候哉

新選組が大坂で鴻池等豪商を集めて金策したという風聞の書留。長州征伐後、会津藩が財政窮乏に陥った元治元年11月頃の噂ではないかと思われます。「例之押付借ニ而余儀なく」「公之威光より浪士ノ威ハ盛ナルカナ」と皮肉な言い回しとなっています。「池田屋事件」「禁門の変」以後、新選組は大いにその勢いを増しますが、一方で庶民には恐ろしい集団という印象が強まったのかもしれません。

＜戊辰戦争の頃＞

慶応３(1867)年12月９日、王政復古の大号令により徳川幕府は廃止され、幕府と運命をともにする新選組は京都から敗走していきます。

慶応4年1月「在京勤中公事日誌」（京市中取締同心日誌）　（関係箇所抜き書き）

一同七日長州より新撰組壱人歩兵六人差渡し申付、右ニ付罷越、一応聞糺之上、墨染牢獄江入置

一十五日、御城付同心饗庭習吉方ニ、新撰組波多野小三郎・小林峰吉右両人潜居候段、参与衆より召捕候様御達ニ付、三藩立合召捕ニ罷越候処、先達而退却いたし候段申述候ニ付、屋内探索いたし候得共不相見、依之引払

一十六日、京極下総守殿より新撰組歩兵〆九人御差出し、立合受取

慶応４(1868)年１月の鳥羽伏見の戦いが終わった直後、戦いに敗れた新選組隊士達が逮捕されて伏見墨染の牢獄に投獄されたり、捕縛前に逃走する記事です。

慶応4年閏4月8日　「人のうわさ」

閏四月八日朝より川原三条大橋より半町計南手ニ梟首製札之事

元新選組近藤勇事　大和

此もの兇悪之罪迹あまた有之上、此度甲州勝沼・武州流山両所ニおゐて官軍ニ敵対セし段、大逆たるニよつて如此令梟首もの也

閏四月

但し首台之端ニ紙ノボリ有之、左ニ記し

新選組元近藤勇事　大和

慶応４年４月25日に江戸板橋で斬首された近藤勇の首は、わざわざ京都へ運ばれ三条河原に晒されました。この記事は、その傍に掲げられた制札の写で、瓦版にもなりました。近藤勇の首を京都の人はどのような想いで見たのでしょうか。

引用資料解説

「風説書」（平和家文書）　綾部藩家老平和安遷の日記。家老という立場からか情報源が多様で噂話を始め色々な藩の内々の書翰の写等も含まれている。

「町代日記」（古久保家文書）　西陣に住む町代（京都町奉行所と町を仲介する事務を行う）古久保氏の日記。町代は奉行所に勤務していたので、情報をタイムリーに入手することができたと思われる。

「役中日記」（千吉西村家文書）　京都の商人西村氏の文久３年の日記。この年、町の年寄り役を務めていたので「役中」としている。

「幕末風聞書留」（大國家文書・寄託）　地下官人である大國家に残された記録。大國家は尊王攘夷派の公家鷲尾隆聚や滋野井公寿らとも交流があり、多くの風説書が残されている。

「人のうわさ」　幕末期の事件記録集ともいえるもので、諸事件に関わる文書や戯れ歌、張り紙・高札等の写を収集しまとめたもの。

「若杉家日記」（若杉家文書）　公家の土御門家の家司（家の事務をする人）である若杉氏の日記。

「御仁恵御触書写」（福長町文書）　「どんどん焼き」被害者への救済に関する文書をまとめたもの。福長町は御所の南、富小路通を挟んだ姉小路から三条通までの町で被害は大きかった。

「在京勤中公事日誌」（京市中取締同心日誌）　幕府組織が廃止された後、町奉行所にかわり京都・伏見の市中取締にあたった篠山藩の同心の日記。

（歴史資料課・古文書担当　辻　真澄）

蓑虫（みのむし）の工芸品について

京都からブームが広がり、昭和戦前期に大流行した、蓑虫の殻を利用した工芸品についてご紹介します。

蓑虫のハンドバッグと言うと、若い人達には怪訝な顔をされますが、年輩の方からは「懐かしいけれど、ほとんど見かけなくなった。」という返事が返ってきます。近頃は、都会では蓑虫そのものを見かけることも少なくなってきましたが、蓑虫の工芸品は、特に物資不足の戦時中には、害虫駆除と皮革、布の代用品を兼ねた、一石二鳥の家庭でもできる簡単な手工芸品として一世を風靡しました。

▲手文庫 蓑虫外皮張　中沢楠猪夫人昭和９年作
（『中沢岩太博士喜寿祝賀記念帖』より）

戦時中に、実際に自分で袋物などを作っていた方によると、その作り方は以外と簡単です。まず、蓑虫の殻の、中心に近い柔らかい部分を湯がき、次にそれを叩いて伸ばします。これを、２cm四方位の正方形に切りそろえ、パッチワーク状に市松模様に繋いだものを、皮革や布の代用品として利用したそうです。家庭では手縫いで、業者はミシンで縫製という違いはありましたが、袋物等を作ることができました。

さて、この工芸品の流行の仕掛け人は、いったい誰だったのでしょうか？その人物は、化学者で、当時の京都工芸界の指導者でもあり、京都高等工芸学校（京都工芸繊維大学の前身）の初代校長も務めた中沢岩太でした。『中沢岩太博士喜寿祝賀記念帖』（中沢岩太博士喜寿祝賀記念会、昭和10年刊）によれば、大正14年に療養のため別府に避寒中の中沢が、地元の知人から蓑虫の手提袋を贈られたところ、これを大変気に入り、製法に改良を加え、特に箱に貼り付ける技術等を新たに考案し、自分でも作品を作るようになったそうです。自作の手箱を皇后陛下に献上したところブームに火がついたとのことで、『大辞典』（平凡社、昭和11年刊）の「蓑虫」の項には、「近来この巣を取り縫ひ合せて雅致ある袋物を製す」と記されています。

このブームに目を付け、服飾品に応用し、商品化して売り出した人物がいます。後に「みのむし翁」と呼ばれた三宅清治郎という西陣織の帯地商でした。三宅はまた、京都市内や郊外、山城地方の各地に、史蹟名勝を案内し、道標となる石標を数多く建てたことでも有名ですが、中沢が園長を務めた染織業者の研究団体である「道楽園」のメンバーでもあり、中沢から直接、技術的な指導を受けたものと思われます。彼は、蓑虫研究所を設けて、蓑虫を飼い、各種の製品の製作販売を始めました。自分自身が、帽子、ネクタイ、ステッキ、靴、財布等々、身の回り品はすべて蓑虫の製品を愛用していたそうです。全国各地のデパート等で展示会を開催して販路を拡大しましたが、昭和15年３月、熊本県のデパートに出展中、急性肺炎のため同地で客死しました。享年69歳。彼の訃報は「みのむし翁熊本で逝く」という見出しで、地元京都の新聞紙上でも大きく報道されました。

戦後になると、しばらくの間は、製品としても作られていたようですが、職人の数も減ってきて、昭和40年代以降は、店頭で見かけることも徐々になくなったようです。現在では、下駄の鼻緒に、爬虫類の皮と同じように部分的に使われているほか、群馬県桐生市の民芸品で、ワンポイント柄に蓑虫の殻を貼り付けた帯等が見られるぐらいになっています。

以上、蓑虫の工芸品を紹介しました。お宅の押入の隅に蓑虫のハンドバッグ等が眠っていましたら、当館へ是非ご一報下さい。

（参考文献『洛園』三宅善三郎編、三宅清治郎商店、昭和16年刊）

最近の収集資料から（平成16年６月～８月）

◆図書資料

〈京都〉

乙訓の原像　中村修著　ビレッジプレス　2004　290p　寄贈

わがまち峰山　峰山郷土史現代編　峰山町・峰山町教育委員会編刊　2004　263p　寄贈

近衛町無番地　京都大学医学部創立100周年アルバム　京都大学医学部創立百周年記念写真集編集室編　京都大学医学部刊　2004　201p　寄贈

京ふろしき　久保村正高文　宮井宏明監修　光村推古書院　2004　71p　寄贈

京都の蝶　府立植物園・御苑・鴨川の蝶たち　松山均写真集　松山均著　ふたば書房　2004　100p　寄贈

京の旬　食と農の達人をめざして　京都ふるさとセンター編刊　2004　244p　寄贈

由良川風土記　風土工学デザイン研究所企画編集　国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所編刊　2004　77p　寄贈

京都半鐘山の鐘よ鳴れ！　世界遺産「銀閣寺」の緩衝地帯　宮本エイ子著　ロマン・ロラン研究所　法蔵館　2004　187p　寄贈

精神医学京都学派の100年　京都大学医学部精神医学教室編　ナカニシヤ出版　2003　121p　購入

嵯峨棗　池田巖著　淡交社　2003　158p　購入

京阪系アクセント辞典　中井幸比古編著　勉誠出版　2002　611p　購入

〈人文〉

東寺百合文書　１　京都府立総合資料館編　思文閣　2004　433，29p

播磨国鵤（いかるが）荘現況調査報告総集編　太子町教育委員会　2004　415p　寄贈

久米邦武歴史著作集　第１～５巻　吉川弘文館　1988～1991　5冊　寄贈

勅奏任官履歴原書　国立公文書館所蔵　上・下巻　我部政男・広瀬順晧編　柏書房　1995　2冊　寄贈

大東急記念文庫善本叢刊　近世篇　１～18，別巻１～３　中村幸彦責任編修　大東急記念文庫　1976　22冊　購入

大谷文書集成　第３巻　小田義久責任編集　竜谷大学　2003　248p　寄贈

奈良絵本・絵巻の生成　石川透著　三弥井書店　2003　532p　購入

漢籍解題　桂五十郎編　東出版　1997　１冊　購入

享保以後大阪出版書籍目録　大阪図書出版業組合編　竜渓書舎　1998　1冊　購入

1902年の好奇心　京都工芸繊維大学所蔵名品集「京都高等工芸学校」美術研究会編　光村推古書院　2003　310p　寄贈

描かれた音楽　西洋楽器と出会った日本絵画　特別展　神戸市立博物館編刊　2003　119p　寄贈

源内焼　平賀源内のまなざし　「特別展源内焼－平賀源内のまなざし」図録　五島美術館　2003　192p　寄贈

ヨーロッパオリエント陶彩　満岡忠成監修　マリア書房　1976　図版90枚　購入

近代日本アート・カタログ・コレクション　36～67　青木茂監修　東京文化財研究所編　ゆまに書房　2002～2003　32冊　購入

西沢笛畝人形画譜　西沢笛畝著　光村推古書院　1977　201，5p　購入

20世紀の美日本の絵画100選　20世紀の美編纂委員会編　日本経済新聞社　2000　246p　購入

〈官庁〉

都市計画年報　平成15年　国土交通省都市・地域整備局都市計画課監修　都市計画協会　2004　1304p　購入

21世紀成年者縦断調査　第１回　厚生労働省大臣官房統計情報部編刊　2004　307p

統計情報インデックス2004　総務省統計局編刊　2004　8，1012p

昭和の政府広報　総理府広報室誕生　内納美成著　三煌社　2004　257p

亀岡の水害写真集　亀岡市都市建設部桂川治水対策室編刊　1992　44p　寄贈

追憶　昭和28年台風13号　舞鶴市建設部管理課企画・編刊　2004　18p　寄贈

宇治市児童虐待初期対応ハンドブック　家庭を地域で見守る視点から　宇治市地域子育て支援基幹センター編刊　2004　37p　寄贈

ＮＰＯ・市民活動ハンドブック　京都市市民活動総合センター編　京都市総合企画局パートナーシップ推進室　2004　308p　寄贈

和装品故障事例集　京都市産業技術研究所繊維技術センター編刊　2004　77p　寄贈

（次頁に続く）

◆**文書資料**（新しく公開する資料）

堀川家御玄関日記　公家堀川家の玄関番の文政６(1823)年の日記。1点。当主の訪問先、お供の名前、時間、帰宅時間、他家からの使者の名前、当家からの使者の名前などが記されている。

新井家文書　加佐郡大江町波美の新井家に伝来した文書。574点。新井家は久美浜代官所大庄屋役等を勤めた。丹後国村高帳、幕府巡見の一件、元禄10(1697)年～明治４(1871)年の波美村の年貢皆済目録と割付状、近代久美浜県の達書、近代の波美村惣代の資料、河守町助役時代の日誌、蚕糸同業組合関係資料ほか。マイクロ収集

松平紀伊守信道書状　亀岡藩主松平紀伊守信道が寺社奉行兼奏者番の就任時（天明８年４月～寛政３年８月）、本願寺坊官下間兵部卿宛に出した書状２通。

岡本保止家文書　乙　大正２年の正倉院解体工事の写真等19点。同家は上賀茂神社の社家から分かれた家で、初代当主が建築関係の仕事をしていた。

総合資料館府民講座のお知らせ

◆**10月20日（水）**　午後２時～
演題「義満時代の政務文書と国家祈祷」
富田正弘氏（富山大学人文学部教授）

受講ご希望の方は、受講希望日、住所、氏名、電話番号を明記し、３日前までに、はがき、ＦＡＸ又はメールでお申し込みください。
＊満席で受講をお断りする場合のみ連絡します。

〒606-0823 京都市左京区下鴨半木町1-4
京都府立総合資料館　庶務課
TEL 075-723-4831　FAX 075-791-9466
メール shiryokan-shomu@mail.pref.kyoto.jp

収蔵展示室の一般公開

当館３階の収蔵展示室において、歴史・民俗資料等の一般公開を行います。

10月19日（火）～21日（木）
午前９時30分～午後４時30分　入場無料
問合わせ：京都府京都文化博物館学芸第一課
TEL 075-213-2893

日　誌（平成16年6月～8月）

6. 4㈮　友の会現地講座（天龍寺）
6. 24㈭　府民講座（第19回）開催
7. 16㈮～8. 31㈫　収蔵品展開催
7. 20㈫　第168回古文書相談

友の会事務局から

今年も秋に、バスによる見学会を予定しています。また友の会が今年発足40周年を迎えることを記念して、秋にも現地講座を行います。当館恒例の東寺百合文書展の列品解説もあります。皆様のご参加をお待ちしています。

◆第19回東寺百合文書展の列品解説
10月６日(水)、21日(木)　午後２時～

◆秋の現地講座
10月15日(金)　有鄰館にて

◆見学会
11月11日(木)、12日(金)の両日、福知山城、観音寺、グンゼ博物苑を見学します。

◎　随時申込みを受け付けています。多数の方の入会をお待ちしております。
問合せ先：友の会事務局
（当館庶務課内　TEL 075-723-4831）

利　用　案　内

休 館 日　祝日（日曜日の場合は、その翌日）、毎月第２水曜日、資料整理期(春期)、年末年始(12月28日～１月４日)

【10月～12月の休館日】
10月11日㈷、10月13日㈬、11月３日㈷、11月10日㈬、11月23日㈷、12月８日㈬、12月23日㈷、12月28日㈫～１月４日㈫

開館時間　午前９時～午後４時30分

交　　通　京都市地下鉄烏丸線・北山駅下車
市バス④ 北８ 北山駅前下車
京都バス㉘ ㊺ ㊻　前萩町下車

ホームページ　http://www.pref.kyoto.jp/shiryokan/

発行　京都府立総合資料館
京都府立総合資料館友の会(振替　01030-2-11991)
〒606-0823　京都市左京区下鴨半木町１の４
TEL(075)723-4831　FAX(075)791-9466

○本誌に関するご意見・ご感想などを当館庶務課までお寄せください。

古紙配合率100%再生紙を使用しています